



Title	儒墨の思想史的交渉と孟子思想の構造についての研究
Author(s)	吉永, 慎二郎
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/40964
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 吉 永 慎二郎
よし なが しんじろう

博士の専攻分野の名称 博士(文学)

学位記番号 第13990号

学位授与年月日 平成10年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文名 儒墨の思想史的交渉と孟子思想の構造についての研究

論文審査委員 (主査)
教授 加地 伸行

(副査)
教授 山形 順洋 助教授 湯浅 邦弘

論文内容の要旨

周代末期の戦国時代を代表する思想家孟子については、孔子の思想の継承者であり墨家思想の批判者とする思想史的位置づけが定説となっている。しかし、本論文は、孟子と墨家との思想の交渉過程を追究することによって、こうした通説を批判的に検討し、孟子の思想史的位置を新たに提示せんとするものである。

全体は、孟子思想の研究史を概括した序章に続き、「墨家と孟子の思想史的位置」「墨家と左氏学派－命と非命－」「孟子の王道論の形成と構造」「孟子の仁義説の形成と構造」の4章から成る。分量は、400字詰め原稿用紙に換算して、約960枚である。

序章では、従来の孟子思想の研究史をまとめ、そこに構造的に見られる朱子学的思考の呪縛を指摘する。即ち、経学的あるいはその近世的展開である朱子学的な思考の枠組みが、今なお研究者の思考を制約していると説く。これに對して、論者は、<いわゆる「邪説」である墨家の批判者としての孟子>という従来の視点よりはむしろ、<墨家思想の批判的受容により自説を展開する孟子>という、孟子が墨家から被った思想的影響に注目するという視点に立つ必要性を主張する。

また、孟子の思想史的理解が経学的朱子学的思考を脱却しきれなかった研究上の具体的原因として、戦国前半期の思想史研究の根本資料として信頼し得ると考えられてきたのが『孟子』のみであったという状況を指摘している。その上で、それを打開する方策として、『墨子』や『左伝』の資料的価値の再吟味と活用とを提唱している。

これを受け、第一章「墨家と孟子の思想史的位置」では、『墨子』の成書年代を体系的に提示した渡邊卓氏の研究を批判的に検討しつつ、孟子の思想形成に与えた墨家思想の影響について論じている。即ち、墨家の立場の一つとして著名な「兼愛」の語を記した『墨子』兼愛下篇が孟子に先行すること、この兼愛下篇のテキストを成立させたのが「萬民系墨家」という集団であると推定されることを指摘し、さらに、孟子の「聖人」概念の展開に墨家の「聖王」概念の介在があることを明らかにして、孟子の思想形成に与えた墨家思想の大きな影響について具体的に論じている。そして、本章末尾では、これらの考察結果を基に、『墨子』十論の成立時期を新たに提示するとともに、「萬民系墨家」が齊の地方を中心で活躍した「齊墨」であることを論証している。

なお、「萬民系墨家」とは、『墨子』尚賢中篇・尚同中篇・天志中篇において特異的かつ多量に使用される「萬民」の語に注目した論者が、それら中篇の思想を生み出した墨家集団の存在を推定し、それを計量的立場から「萬民系」と仮称した上で、孟子に思想的影響を与えた墨家集団がこの「萬民系墨家」であると推測したものである。

第二章「墨家と左氏学派－命と非命－」では、論者が注目する今一つの文献である『春秋左氏伝』の成書年代を推定しつつ、『左伝』における「命」の思想と墨家の「非命」の思想との関係について検討している。『左伝』については、平勢隆郎氏の『新編史記東周年表』の考証によって、同書の戦国中期の文献資料としての信憑性が確認されているが、ここではさらに、『左伝』が<春秋><左氏春秋><左伝>という成書年代を異にする三層のテキストから構成されることを推定し、孟子がこの内の前二者を見ていた可能性を指摘する。

こうしたテキスト分析を基に、墨家が批判攻撃する「命」の思想がこの<春秋>のテキストに示される<天－王－諸侯>という命の構造、即ち「先王の命」の思想に外ならぬこと、この周王朝の秩序の根幹をなす「命」の思想を否定するものこそ墨家の「非命」(命の否定)の思想であること、この「非命」の思想が、諸侯がそれぞれ王を僭称(称王)する事態となったことの思想的背景であることなどを論じている。そして、この「非命」の思想から「放伐」の理論が形成され、また「命」の否定の後の秩序規範として「義」が構想され、「尚賢」(賢人を尚ぶ)に基づく「禅讓」の理論が形成されること、さらに、この「義」をめぐる理論として尚同・天志・明鬼各篇に見える祭政一致型の理論が登場するという墨家思想の構造を明らかにしている。

第三章「孟子の王道論の形成と構造」では、このような墨家思想隆盛の時代にやや遅れて登場した孟子が、いかなる王道論を構築したかを検討している。まず、墨家の放伐論が天下的世界の王権交代論であることに根本的影響を受け、孟子の政治理論が天下的世界の放伐理論へと展開を遂げ、王道論の理論的骨格が形成されたことを論じている。次に、孟子の王道論に道徳主義的王道論と政治主義的王道論との二つの側面があり、前者は伝統的共同体に基盤を置く孟子本来の論理、後者は天下的世界の下の墨家理論を全面的に摂取して形成された論理であることを指摘し、この二つの理論を統合したのが、「仁者無敵」という<仁の放伐論>であるが、伝統的共同体ならびに天下的世界とを共存させるという無理があり、政治理論としては説得力を失うに至った、という孟子の思想の展開を説明している。

さらに、孟子の禅讓論批判と天の問題とを考察し、孟子は墨家の人為的決定に基づく禅讓論を否定し、禅讓を決定する要因を民の帰趣と天の命という自然に帰そうしたこと、ここには再び「命」の思想の復活が見られるが、孟子はその反面で禅讓という理論を維持していること、これは禅讓論を通して聖人の系譜を構想するためであって、王たるに十分な徳を備えながら薦むる者無きため等の「命」の故に王たりえない聖人の系譜を構想し、そこに孔子も孟子自身をも位置づけんとする意図からであったこと、などを論ずる。即ち、孟子における禅讓論が王権交代論とは別の理念を付与されて儒家理論に取りこまれたことを明らかにしている。

次に、この王道論の問題と並んで重要な仁義説について検討するのが、第四章「孟子の仁義説の形成と構造」である。ここでは、孔子、墨家、孟子それぞれの仁義説を再検討し、孟子の仁義説が孔子の仁・義説、初期墨家の仁・義説、萬民系墨家の仁義説という思想史的展開の上に位置づけられることを論じている。即ち、孔子の「仁」が自律的道徳意志による道徳であり、「義」が国家共同体レベルの倫理であること、これに対して、初期墨家は天的な共同体の道徳として「仁義」を併称し、既存国家を越える視点を明らかにしたこと、さらに萬民系墨家が天下を統治する視点から「仁義」を天的な共同体の倫理として位置づけたという思想的展開を構想した上で、孟子がこの「仁義」を、内面の性に根ざす先天的道徳性として把握するとともに、血縁共同体の倫理としても位置づけたという孟子の思想史的位置づけを行なう。また、こうした比較分析を通して、論者は、孟子の後、天的な共同体という理想形に根拠を置く墨家の「仁義」が法に取って代わられるのに対して、孟子の仁義説が血縁共同体を半永久的に保守する理論として儒家の思想的霸権の基盤となって分裂して行くという孟子の思想の歴史的意味を指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦国時代を代表する思想家孟子の思想について、その思想形成の過程と思想の全体構造とを解明せんとしたものである。従来の研究における孟子の位置づけは、<孔子の思想の継承者>とするのが定説であった。しかし、論者は、先行研究を丹念に検討しつつ、こうした定説が実は、道統を主張する朱子学的な枠組みにとらわれた固定観念であったと指摘している。そして、墨家の思想と孟子の思想との比較を通して、<墨家の思想の受容者としての孟子>という全く新たな思想史的位置づけを試みている。

確かに、従来の思想史研究では、戦国時代の前期に隆盛し、孔子と孟子との間に位置する墨家の思想の解明が、大きな課題として残されていたと言える。本論文は、この墨家の思想の体系的な理解に努めるとともに、それを手がかりとして、孟子の思想を解明するという、極めて独創的な内容である。本論文の意義は、まず、この点に求められるであろう。

各章の内容に即して言えば、まず第一章において、墨家の思想について詳細な分析を行ない、最終的には、『墨子』の「十論」（墨家の中心思想を記した兼愛・非攻・尚賢・尚同など十の論、それぞれ上中下の三篇から成る）各篇の成立年代を一覧表として提示するに至っている。『墨子』十論の成立とその思想内容について体系的に考察したものとしては、これまで、渡邊卓氏の『古代中国思想の研究』があり、ほぼ定説となっていたが、本章における論者の検討作業は、渡邊説を大幅に修正するものとなっている。渡邊説に対する初の体系的な批判として高く評価できよう。

第二章において注目されるのは、墨家の「非命」説に対する新解釈である。これまで、『墨子』非命篇に説かれる「非命」の思想については、命定論（運命決定論）に対する批判を述べたものという理解が漠然となってきた。これに対して論者は、『春秋左氏伝』における「命」の思想に着目し、その「命」の思想を、周王朝の秩序の根幹をなす「先王の命」の思想と捉えた上で、これを否定するのが墨家の「非命」の思想であると解釈した。また、そこから墨家の「放伐」理論や「命」に代わる「義」という秩序規範が登場したことを明らかにしている。

また、第三章や第四章においても、孟子の思想の根幹をなす王道論と仁義説について、極めて興味深い推論がなされている。即ち第三章では、孟子の王道論に道徳主義的王道論と政治主義的王道論との二つの側面があることを分析した上で、後者の王道論が墨家の理論を摂取して形成されたものであることを指摘している。また、第四章では、孟子の仁義説が、孔子・初期墨家・萬民系墨家各々の仁義説の展開を受ける形で形成され、その結果、孟子の「仁義」は、先天的道徳性であるとともに、血縁共同体の倫理としても位置づけられたことを論証している。

さらに、全体を通して、論者の精密かつ大胆な論証方法も高く評価されよう。本研究では、「兼愛」「聖王」「萬民」「命」「仁義」など、中国古代思想史の上では一般的と思われ、それゆえ逆に見過ごされがちな用語について、厳しい吟味がなされている。微妙な表現の異なりについての検討、語彙の計量的な分析など、精密な作業が積み重ねられており、しかも、それが単なる事例の列挙に終わらず、極めて柔軟な推論へと結実している。

このように、本研究は、従来の孟子研究に大きな衝撃を与える画期的な業績であるとともに、『墨子』や『左伝』の研究についても、斬新な視座を提供したものとして、高く評価できよう。

もっとも、本論文にいくつかの問題点がないわけではない。まず、論者は、孟子に与えた墨家の思想の影響を強調する余り、孟子が墨家の思想を受容し、またその痕跡を隠すために、微妙な用語の置き換えを行っているとするが、これは「著作権」を念頭に置いたやや現代的な感覚ではなかろうか。また、「命」と「非命」とをめぐる議論について詳細な再構成を試みているが、当時の思想界における議論がこうした精密な段階を踏んで整然と展開していたと言えるのかという疑問も残る。さらに、論者は、萬民系墨家という集団の存在を想定し、その思想が孟子の思想形成に大きな影響を与えていたとするが、そうした存在を示唆する伝承が他の文献に見られないのも、やや不安な点として残る。しかし、萬民系墨家の存在と秦漢期における墨家の急速な衰亡との関係などは、本研究から導かれる興味深い課題であると言えよう。

なお、平成10年1月19日(月)に実施した所定の学力確認試験に、本申請者は合格した。

本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分に値すると認定する。